

<学会記録>臨床実習生のHBs抗原, 抗体の保有率について : 57年度との比較(東日本学園大学歯学会第2回学術大会)

著者名(日)	米田 修子, 高野 英明, 金子 昌幸, 筧 弘毅
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	3
号	1
ページ	106
発行年	1984-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00007102/

質 問

高松隆常(保存・I)

①レクチンを用いた組織細胞化学的検査に要する所用時間はどの位か。

②また、所用時間の短縮が可能かどうか。

回 答

賀来 亨(口腔病理)

①PAP法を用いており、4 step ですので2日間にわけておこなっております。おそらく、全行程の時間は5～6時間になると思います。

②ビオチン、アビジン法を用いれば、時間は短縮されると思います。

質 問

磯貝恵美子(口腔衛生)

①UEA-I binding glycoprotein は tumor specific antigen である可能性はあるのか否か。

②細胞のガン化にともない正常組織に本来存在するような表層糖タンパクが減少するようなことはこのような case で認められるのか。

回 答

賀来 亨(口腔病理)

①レクチンは tumor specific ではありません。この UEA-I レクチンは α -L-fucose に特異的に結合するので、おそらく、細胞膜に α -L-fucose が存在するか、存在しないかによって相違すると思われます。

②正常に存在する antigen など癌によって、増減することはあると思います。例えば、 α -fetoprotein は胎児性蛋白ですが胎児肝で産生され、正常肝ではほとんど認められません。肝癌では低分化型、高分化型では産生が低く、中分化型肝癌で産生が高い。

5. 臨床実習生の HBs 抗原、抗体の保有率について — 57年度との比較 —

米田修子, 高野英明, 金子昌幸,
笥 弘毅 (歯科放射線)

過去2年間における、本学臨床実習生の HBs 抗原、抗体の陽性者率について比較検討し、得られた結果は以下のごとくであった。

1) HBs 抗原陽性者率は4.1%で、去年のその0.9%と比べて極めて高率であり、全国平均と比較してもかなりの高率を示した。また、HBs 抗体陽性者率は、去年、全国平均の両値に比べて低率であった。

しかし、2年間の合計については、HBs 抗原、HBs 抗体陽性者率の両方において、被検者の増加によって値が平均化され、全国平均に近づいたと考えられる。このことから、さらに多くの被検者を対象とし比較検討していく必要があることがうかがわれた。

2) 出身地方別による HBs 抗原陽性者率は、北海道出身者において全国平均よりも高めの値であり、HBs 抗体陽性者率については、関東、近畿および四国を除き、それぞれが全国平均の範囲に含まれるものと考えられるが、比較的、北海道地方、東北地方の出身者が高値を示し、いわゆる北国の生活様式や風土的要素が関与していると

考えられた。

3) 年令別による、HBs 抗原陽性者は、23才～26才に集中していて、その他の年令では1名も認められなかった。

一方、HBs 抗体陽性者は、高齢になるにつれ高率となるが、22才～27才までの陽性率が12%台から18%台であるため、このことから被検者の多くがかなり早い時期に感染をうけていると考えられた。

質 問

磯貝恵美子(口腔衛生)

Hepatitis B virus の HBs Ag は group specific “a” determinant をもち、これはさらに subtype determinant d, y にわけられる。さらにその他 determinant として ω , γ がある。RIA 法で調べているのは、 $ay\omega$, $ad\omega$, $ay\gamma$, $ad\gamma$ の4つの型のうちどれを念頭においているのか。

回 答

金子昌幸(歯科放射線)

HBs 抗原の Subtype についての検討は行っておりません。臨床的にはそこまで行う必要がないものと考えられます。

6. 臨床実習における有床義歯患者の動向について

中出琢哉, 阿部 格, 斉藤 聡,
新出英幸, 田中 淳, 佐藤謙裕,
高崎英仁, 原橋豊信, 伊東由紀夫,
田村 武 (補綴・I)